

トウキョウフォレックス上田ハーロー (株)

スポット FX 部

ドル円《市場・相場の動き》

レンジ 113 円 25 銭 (10/22 TKO) ~ 117 円 95 銭 (10/15 LDN・NY)

1 日に発表された日銀短観における大企業製造業業況判断は市場予想を上回ったが、中小企業の景気は悪化した内容となったことで円相場への影響は限定的となった。欧州時間にはドル円は 114 円台後半で下値の底堅さを確認したことで、115 円 00-10 銭からジリ高推移となって一時 115 円 80-85 銭まで買い上げられた。その後米シティグループが、第 3 四半期の純利益が約 60%減少する見通しであることが報じられると、信用収縮懸念が意識され、115 円 35-40 銭まで値を下げた。3 日の欧州時間になるとドル円はユーロ円の上昇と共につれ高推移となり、115 円 80 銭近辺から節目と思われた 116 円 00-10 銭水準を上抜けて、一時 116 円 25 銭まで上昇した。5 日に発表が予定されている米雇用統計の数字はそれほど悪くないとの見方が浮上すると、ドル円は 116 円台前半から 116 円台後半に上昇して高値圏で取引された。その後発表された 9 月米雇用統計における、非農業部門雇用者数は +11.0 万人 (事前予想 +10.0 万人)、失業率は 4.7% (事前予想 4.7%) となった。この結果非農業部門雇用者数が予想を上回ったことから、米労働市場は底堅いとの見方が広がり、直後はドル買いとなりドル円は 116 円 40-50 銭から一時 117 円 29 銭まで急上昇し、8 月 15 日以来となるドル高・円安を示現した。また非農業部門雇用者数 8 月分が、-0.4 万人から +8.9 万人に大幅上方修正されたことも、ドル買い材料視された。

週明け 8 日は国内においては体育の日、また米国においてもコロンバスデーと祝日が重なったこともありドル円は 117 円台で終始推移した。9 日の NYK 時間の午後に FOMC 議事録が公表され、「将来の政策は市場やその他条件の展開次第」との見解を示し、追加利下げに含みを残す内容となったことで、米追加利下げへの期待感から米株式は上げ幅を拡大し、リスク許容度が高まったことから円は売られ始め、クロス円は軒並み上昇となりドル円もクロス円の上昇を横目に、116 円台後半から 117 円台前半に水準を切り上げた。11 日の午後には日銀金融政策決定会合が賛成 8・反対 1 の賛成多数で政策金利は据え置きになったことが報道された。NYK 市場は米株価動向を睨んでの取引となり、NYK ダウが反発して始まると、投資家のリスク許容度が高まるとの思惑から円キャリー取引再構築の動きが強まり、ドル円は 117 円台半ばから一時 117 円 79 銭まで上昇する場面も見られたが、市場では今年の安値 111 円 60 銭から高値 124 円 14 銭の半値戻しの水準となる 117 円 87 銭を強く意識した動きとなり、ポジション調整やオプションに絡んだドル売りなどで上値は抑えられた。

15 日の欧州時間にトリシェ ECB 総裁が為替市場の動向について「発言を自制することが適切である」と述べてユーロ高を容認したとの見方が広がり、欧州勢や海外投機筋のユー

ロ買い・円売りを活発化すると、166 円台後半から 167 円台後半に買い進まれ、約 1 円の上げ幅を記録した。一方ドル円はユーロ円の上昇を横目に 117 円台半ばから 117 円 83 銭まで上昇して上値を窺ったが、117 円 80-90 銭水準は、実需筋や利益確定のドル売りオーダーが入りやすく、伸び悩むと小幅値を下げてもみ合いが続いた。NYK 市場のドル円は NYK 連銀製造業景気指数が市場予想を大きく上回り、米景気先行き懸念が後退して一時 117 円 95 銭まで上昇して今月の高値をつけた。しかしその後、米シティグループの第 3 四半期の決算が大幅な減益となったことや、同グループ最高財務責任者 (CFO) が第 4 四半期も引き続き悪化するとの見通しを示したことから、信用不安が広がり米株式は下げ幅を拡大した。また原油先物相場が大きく上昇したこともドルを圧迫して、ドル円は一時 117 円 10 銭近辺まで急落する動きとなった。

16 日、欧州時間序盤に欧州株式が寄り付き後に急落したことを受けて、リスク回避目的と見られる円買いの動きが加速した。ユーロ円は 166 円 80-90 銭から断続的に S/L を巻き込みながら一時 164 円 90-95 銭まで急落する動きとなった。一方ドル円も 117 円台前半から 117 円 00 銭割れの S/L を誘発し一時 116 円 45 銭まで値を下げる展開になった。財務省幹部から「欧州当局者からユーロ高に対する懸念が示されており、G7 では世界経済動向の中で為替について発言する人がいるかもしれない」との発言が伝わったことが、ユーロ円においてのユーロ売り・円買いを誘い、他のクロス円やドル円の円買いに波及したとの見方も出ていた。

17 日、インド株式が海外の投資抑制につながる規制を発表したことを受けて 8% の下げとなったことから、日経平均株価は一時 300 円を超える下げを記録すると、ドル円はリスク回避目的の円買いが優勢となり 116 円 60-65 銭から一時 116 円 15-20 銭に値を下げた。欧州時間には円買いの勢いにも一服感が広がって、市場は円を売り戻す動きが優勢となりドル円は 116 円 60-70 銭に水準を切り上げた。その後も短期筋や欧州勢が積極的にドル買い・円売りに動き一時 117 円 20 銭まで買い上げられた。しかし東京市場につけた安値から約 1 円上昇したことで、117 円台前半では米経済・景気先行き不透明感を背景とした戻り待ち売りや利益確定のドル売りに上値を抑えられる形となった。NYK 市場に入ると、米住宅着工件数が 14 年ぶりの低水準を記録したことや、原油先物相場の上昇がドルを圧迫した。トルコ議会がイラクへの越境攻撃を承認するなど中東情勢の緊迫化を背景に地政学リスクが高まったこともドル売り・円買いを誘い 117 円前半から 117 円を割り込み 116 円台前半まで下落した。

18 日、欧州時間の序盤ドル円は 116 円台半ば付近で取引されていたが、中国人民銀行周小川総裁から「利上げの可能性を排除しない」「流動性抑制のため預金準備率引き上げの用意がある」など金融政策引き締めを継続する内容の発言が伝わると市場は人民元高が円買い要因になると受け止め、ドル円は一時 115 円 95 銭付近まで下落した。NYK 市場に入ると、米金融大手バンク・オブ・アメリカの 7-9 月期決算が大幅な減益となったことで、金融市場の混乱による信用不安が広がり、ドル円は 115 円台後半から 115 円台前半に下落した。

翌日の東京市場では午後に入ると、日経平均株価が下げ幅を拡大したことを受けて市場参加者のリスク許容度が低下し、ドル円は115円を割り込み一時114円85-90銭まで下落した。インド株式が3%を超える下げを記録し軟調推移となったことも円買いにつながった。NYK市場において主要企業の7-9月期決算が発表されると多くのこの企業で事前の予想を下回るものが目立っていたために米株式は大幅安となり、ドル円は株価の下げに連動してリスク回避目的のドル売り・円買いが進み、115円台半ばから114円台後半に下落した。NYK時間の午後にはG7の声明草案が公表されたが、ドル安やユーロ高などに関しての言及は見られなかったことから、今後もドル安は続くとの思惑が浮上し米株価は更に下げ幅を拡大した。ドル円は株価の下げにつれて114円台半ばまで値を下げ、他のクロス円も円売りポジション解消の動きが進んだ。

週明け22日のSYD市場でドル円は114円15-25銭で始まったが、米株式が急落したことを手掛かりに、リスク回避目的のドル売り・円買いが加速して、午前9時前には一時113円25銭と9月10日以来となるドル安・円高水準まで急落して今月の安値をつけた。G7において中国の人民元切り上げペースを急ぐべきだとの文言が組み込まれたことも、円買い材料視された。東京市場の午前には約一ヵ月半ぶりのドル安・円高水準を迎えたことで、国内輸入企業や機関投資家などが積極的にドル買いに動き、113円台半ばから113円台後半付近での取引となった。東京市場の午後には日経平均株価が下げ幅を縮小していることを背景に、ドル円は実需筋のドル押し目買いが見られ、113円台後半から114円台前半に水準を回復して取引された。欧州時間に入ると、アジア株式や欧州株式が軟調推移となったことを手掛かりに、リスク回避目的と見られる円売りポジション解消の動きが強まった。ユーロ円は163円台前半から断続的にS/Lを巻き込んで一時160円台半ばまで急落する動きとなった。

24日には米大手証券メリルリンチの7-9月期決算が悪化し、サブプライム問題による信用不安が強まったことや米中古住宅販売件数が予想を下回ったことを受けて、米株式は大幅安となった結果、ドル円は114円台半ばから113円台後半に下落したが、NYK時間の午後にはFRBが緊急に公定歩合を引き下げるとのうわさが流れると、米株式は急反発する動きを見せ下落分を取り戻す形となった。ドル円も株価の動きに連動して113円台後半から114円台前半に水準を切り上げて取引された。25日のNYK市場ではまたしてもサブプライム関連からか、米保険大手AIGの巨額損失のうわさから米株式が急落するとドル円も株価の下げにつれて113円台後半に下落した。その後AIG巨額損失のうわさが否定されると、米株式は上昇に転じて、ドル円もつれ高推移となり、114円台前半に水準を回復した。26日、NYK時間の午後に入ると、マイクロソフトの明るい業績見通しや米住宅ローン大手カンントリーワイド・フィナンシャルが人員削減に伴い、第4四半期は黒字が見込まれると発表したことを受けて、NYKダウは100ドルを超える上げ幅を記録した。この流れを受けてドル円は114円25-30銭まで上昇したが、月末の米FOMCにおいて一部では0.5%の追加利下げを予想する向きが出ていることから、上値は重く伸び悩む展開になった。その後は米証券大手

ベア・スターンズが幅広い業務で約 300 人の人員削減を発表などが伝えられたが米 FOMC を控えたせいもあり 114 円台での推移に留まった。

31 日、欧州時間に入ると、日銀が政策金利を据え置き、当面利上げは難しいとの見方が広がり円は売られ始めた。ドル円は 114 円台後半から徐々に上値を窺い 115 円台前半に上昇、その後発表された ADP 雇用統計や、米第 3 四半期 GDP が好結果となったことから、ドル円は一時 115 円 50 銭近辺までドル買いが進んだ。午後に発表された米 FOMC 政策金利は大方の予想通り、4.75%から 0.25%引き下げられ 4.50%となるとドル円は NYK ダウに連動する動きとなり、114 円台後半から 115 円台前半で取引された。また FOMC において、FRB はインフレに対して警戒を示し、金融政策に関しては中立的なスタンスをとる姿勢が見られたことで、年内の追加利下げはやや後退する内容となった。FOMC の結果、欧米との金利差縮小との思惑からユーロはドルに対して一段高となり、ユーロドルは一時 1.4508 まで買い上げられ、史上最高値を更新した。一方ドル円は 115 円台前半で小動きが続き、結局 115 円 35-45 銭で今月の取引を終了した。

ユーロドル《市場・相場の動き》

レンジ 1.4015 (10/9 TKO) ~ 1.4508 (10/31 NY)

今月は 1.42 台で始まった後、ユーロ高懸念から 1.40 台前半まで下落したが月末に向けては再び上昇し 1.45 台の最高値をつけた。

先月の強気ムードのまま始まったユーロドルは欧州要人からのユーロ高牽制発言を受けて軟化し始め、9 日には今月最安値となる 1.4015 まで値を下げた。ただ二大最弱通貨の一つであるドル（もう一つは円）の買いには現時点では限界があり、中旬には 1.42 台まで値を戻した。また米国、イラク、トルコの地政学的リスクによりドルからユーロへの通貨シフトが加速していることもドル売りの材料となった。また G7 でユーロ高に対し特になにもなかったことでそのまま 1.4322 まで上昇した。その後サブプライム問題が欧州まで波及する中いったん 1.41 台まで値を下げたが、米国の金融機関の決算発表が相次いで悪かったためドル売りとなり、ユーロは再び上昇し始め、月末となる 31 日には米 FED が利下げ発表をし、今月最高値となる 1.4508 をつけた。

今後の動きとしては、サブプライム問題の影響が欧州金融機関の決算にいかにか現れてくるか、8 日の ECB 理事会で利上げはないであろうがトリシェ総裁のインフレ懸念を念頭に利上げを匂わす発言にどうマーケットが反応していくかに注目される。

ユーロ円《市場・相場の動き》

レンジ 160.47 (10/22 LDN) ~ 167.73 (10/15 LDN)

今月のユーロ円は、163 円台後半で始まった。新四半期入りや堅調な株価から、リスク許

容度が高まったことを受けた円売りユーロ買いが進み、ユーロ円は一時 165 円台前半まで上昇した。しかし、「近く ECB のユーロ売り介入があるのでは」との新聞報道からユーロ売りが強まり、さらに、ユーロ圏当局者のユーロ高懸念発言が相次いだこともあってユーロ円は 163 円台半ばまで下落した。4 日の ECB 理事会では事前予想通り政策金利の据え置き (4.00%) を決定した。トリシェ総裁の会見は、過去数ヶ月使用してきた「金融政策は緩和的」との一文が削除された。これが ECB の利上げ政策打ち止めと受けとめられたこともユーロ軟調の一因となった。しかし、翌日の米雇用統計で前月、前々月の非農業部門雇用者数が大幅に上方修正されたことからドル買いが優勢となりドル円が急騰、これに連れてユーロ円も 165 円台前半まで上昇した。

9 日、公表された FOMC 議事録の内容は、市場の予想ほど米国景気に弱気な見方ではなかった。これを好感し、NY ダウが大幅に上昇、史上最高値で引けた。さらには独財務相がユーロ高を容認する発言をしたこともあり、ユーロが買われてユーロ円は 166 円台まで上昇した。11 日の日銀金融政策決定会合は、予想通り政策金利の据え置きを決定した。福井日銀総裁の会見も利上げに慎重な内容だったことから日銀の利上げ観測が後退、円が売られてユーロ円は 167 円台半ばまで上昇した。その後もユーロ円は堅調に推移、15 日に今月の高値である 167 円 73 銭を付けた。しかし翌日、日本の財務省幹部から「欧州当局者からユーロ高に対する懸念が示されており、G7 では為替について発言する人がいるかもしれない」との発言があるとクロス円の急激な買い戻しからユーロは急落、一時 165 円を割り込む水準まで下落した。さらに週末には世界的な株価の下落から、リスク許容度の低下による円キャリートレードの戻しで、ユーロ円は 163 円台後半まで下落した。

翌週も軟調な株価に連れて円買い戻しは続き、22 日に 160 円 47 銭の今月安値を付けた。その後も株価動向に振られやすい展開は続き、161 円台後半から 163 円台後半の水準で乱高下した。26 日には、ユンケル・ユーログループ議長がユーロ高容認発言をしたことからユーロは堅調に推移し、164 円台半ばまで上昇した。その後も各国の株高を背景に円キャリートレードが活発化し円売りが優勢になった。さらに、日銀半期展望レポートが今年度の成長率や物価上昇率の見通しを下方修正したことも円売りに拍車を掛けて、ユーロ円は 167 円台前半まで上昇し今月の取引を終えた。

他通貨《市場・相場の動き》

| レンジ | 対ドル高値 | 対ドル安値 |
|----------|-------------------|----------------------|
| イギリスポンド | 2.0825 (10/31・NY) | — 2.0245 (10/12・LDN) |
| スイスフラン | 1.1517 (10/31・NY) | — 1.1895 (10/9・LDN) |
| 豪ドル | 0.9345 (10/31・NY) | — 0.8752 (10/22・NY) |
| カナダドル | 0.9419 (10/31・NY) | — 1.0014 (10/4・TKO) |
| シンガポールドル | 1.4456 (10/31・NY) | — 1.4859 (10/4・TKO) |

| | | | |
|-------|------------------------|---|------------------------|
| タイバーツ | 31.35 (10/17&22・TKO) | — | 31.85 (10/1・TKO) |
| 韓国ウォン | 899.60 (10/31・SOUEL) | — | 921.40 (10/11・SOUEL) |
| 中国人民元 | 7.4608 (10/31・SHANHAI) | — | 7.5288 (10/15・SHANHAI) |

AUD・NZD・CAD・STG

カナダドル相場は、10月初旬の好調な失業率の発表を受けて0.98を割り込み対円でも7月の高値119円台に上伸した。金先物の28年ぶりの高値更新などの見られる商品先物相場の上昇にも引きずられ、また月末にかけての原油相場の高騰、米国大手鉄鋼によるカナダ鉄鋼大手の大型買収の動きなどに47年ぶりの高値水準を示現して越月した。英国ポンド相場は、それ自身の金利引き下げを織り込んでいるため、前半はややこう着状態となっていたが、月末にかけての米国金利引き下げ予測による米ドルの下落に、堅調で地合いの高値圏で越月した。豪ドル相場は月初めから豪経済の好調さを背景にキャリートレードの再開と思われる豪ドル買いに上伸したが、くすぶるサブプライム問題による信用収縮懸念に下落。その後11月の利上げにつながるCPIが市場予測を上回り再び上伸する形で越月した。

SIN\$, THB, KRW, 人民元, HK\$

10月のアジア通貨の中で目立った動きは、HK\$相場。中国人の個人によるHK株式取得の解禁をめぐる思惑がきっかけとなり、7.77台から月後半には2005年5月に変動幅が設定されて初めて対米ドルの変動幅上限の7.7500まで買い進む動きとなった。23日には同水準で香港金融管理局が介入を行った。好調な香港株式相場に流入が続く中国本土や外国人投資家の資金の流れが後押しとなっている。人民元は、第一週が国慶節で休場、その後共産党大会を控え小動きとなり、心理的抵抗水準の7.5000手前で高値警戒感もあったが、月末24日には結局7.5000を突破して、いつものように高値圏で越月。シンガポールドルも10月は一貫して買い進まれた。アジア通貨危機以来の高値を更新して始まった相場は、堅調な株式市場への旺盛な資金流入に10年来の高値を更新して越月しました。韓国ウォンも株式指数が史上最高値をつける中、月初めからこちらもアジア通貨危機以来、昨年末の高値を更新して始まった。その後7月、10月と抵抗線になっていた913.00を突破して一気に高値圏で越月した。アジア通貨全般にドル売りアジア通貨買いが進む中、タイバーツは非常にゆっくりの動きで取り残された形、オンショア、オフショアともに大きな動きとはならなかった。

以上